

海外生活 エッセー

パリ事務所

フランスにおけるストライキとデモ

(一財)自治体国際化協会パリ事務所 元所長補佐 宇都宮 生雄 (熊本市派遣)

→ 公共交通機関のストライキ

2018年4月から6月末までの3か月間にわたり、SNCF（フランス国鉄）が、2日間ストライキ、3日間通常運行の5日サイクルでストライキを行いました。毎年行われるとはいえ、これほど長期にわたり行われることは珍しく、過去最大規模ということでした。高速列車TGVをはじめ、SNCFが運営する鉄道は、ストライキの該当日には運行本数が減少されました。

パリ市内のメトロやバスはRATP（パリ市交通公社）が運営しており、ストライキは行われなかったため、毎日の通勤には影響がなかったのですが、出張に際して私も次のような体験をしました。

昨年5月下旬、フランス南部のエクスプロヴァンス市への出張に際し、帰りの日がSNCFのストライキの予定日と重なってしまい、TGVの代わりに飛行機で往復することになりました。出発当日オルリー空港でマルセイユ行きへの搭乗を待っていると、予定便が急にキャンセルされてしまいました。航空会社エールフランスでもストライキが行われていましたが、その日は特に予定はなく、出発直前での欠航でした。私たちはマルセイユから150km離れたモンペリエ行きへの便に振り替えられることになり、空港間の移動は航空会社がタクシーの手配を行いました。結局、マルセイユには深夜の到着となり、鉄道と航空便の両方で影響を受けました。

ストライキ自体は労働者の権利として広く国民に理解されている一方、SNCFの長期ストライキは赤字経営の国鉄の改革・民営化を図る政府に対して反発するものです。国鉄の職員は、民間よりも高い年金や賃金、早期退職、割引運賃など良い待遇を受けていることから、この長期ストライキには同情的でない市民も多くいました。

→ 長期にわたるデモ

ストライキが落ち着いたかと思うと、2018年11月17日から政府の燃料税の引き上げに反対するデモGilets jaunes（黄色いベスト運動）がフランス各地ではじまりました。フランスでは、自動車に蛍光の黄色いベストの備え付けが義務付けられており、燃料課税強化等への反対のシンボルとなりました。この日はリヨン市で日本関連のイベントが行われ、クレアパリ事務所も自治体PRのために参加していたのですが、道路封鎖に伴いリヨン市内の会場まで車で移動することができませんでした。

運動はきっかけである燃料税の削減に続いて、生活水準の改善、富裕層税の再導入、最低賃金の引き上げ、マクロン大統領の辞任などを要求し、2019年7月現在も毎週土曜日に行われる全国的なデモとして長期にわたり続いています。デモにもさまざまな種類のものがあり、フランス人にとっては慣れたものですが、今回の運動は、その影響、期間ともに特別なものだと思います。運動の中で、暴徒化した抗議者が放火や破壊、略奪に及ぶなど激しい行為もみられました。事態沈静化を図るため、マクロン大統領はフランス各地で国民大討論を開き、低・中所得者向けの減税を行うことになりましたが、政治的にも今後の展開が注目されます。最後に、フランスを訪れる際は、外務省の「たびレジ」に登録するなど、ストライキやデモ、交通、安全の情報を注意を払ってお越

しくください。



黄色いベストを着て反対運動を行うデモ隊